

# 校長通信

## Morifun

### <青春は密なのに…>

皆さんご存じの通り、遂に甲子園の優勝旗が白河の関を越えました。仙台育英高校が第104回全国高等学校野球選手権大会決勝で下関国際高校を8-1で破り、東北のチームとして初優勝の栄冠を勝ち取りました。本校野球部は残念ながら出場は叶いませんでしたが、同じ東北勢として感じるものはあったはずです。今度はまず来春の選抜大会出場を目標に頑張りたいと思います。

そんな中、優勝に導いた須江監督のインタビューでの発言が話題となりました。コロナ禍で思うような高校生活を送れなかった生徒たちへ「青春ってすごく密なので。でもそういうのは全部ダメだダメだと言われて」「苦しい中で諦めないでやってくれた。それは全国の高校生が本当によくやってくれた」「ぜひ全国の高校生に拍手をしてもらえたらと思います」と涙をにじませながら語りました。確かに、青春は密であるべきです。でも、その青春を謳歌できない現実があります。この夏は緊急事態宣言等の規制がありませんでした。お盆等で人の動きもかなりあり、ここに来て第7波も大変な勢いになっています。ポストコロナというのはまだまだ先のことになりそうです。まずはウイズコロナという形で、何とか日常に近い学校生活をして青春時代を送ることができるよう、行動に気を遣っていきましょう！

### <さんさ踊り…3年分の思いを込めて>

8月2日(火)3年ぶりのさんさ踊りに本校さんさ部が参加しました。天気予報では、この期間雨の予報でしたが、祭りを待ち望んだ多くの人の願いを聞いてくれたのか、盛岡はこの4日間夕方から見事に雨が上がる絶好の祭り日和となりました。この日、さんさ部の生徒たちは満面の笑みと若さ溢れる躍動的な舞で観衆を魅了しました。「さんさ甲子園」というイベントは中止となりましたが、本校も含め6校がパレードに参加しました。私も浴道からしっかりとこの眼に焼き付けました。



### <全校礼拝より>

#### 終業礼拝(7/26) 旧約聖書 創世記1章31節

今日は皆さんに賛美歌を紹介したいと思います。讚美歌集には乗っていない歌ですが、毎年唄っているので、2、3年生は聞いたことがあると思います。

「主につくられたわたし」というタイトルの歌です。まず歌詞を紹介しようと思います。1番は、

1. わたしらしく生きよう 自分に生かされて  
おとならしくでもなく こどもらしくでもなく  
ただ わたしを造られた神に应える  
ただ わたしらしく生きることで

「私らしく」というのがキーワードで、先程読んだ創世記の一節ですが、聖書では、私たちが神によって創られた存在だ、と言っているんですね。偶然今地球上に生きているのではなく、神が創って下さった。神に造られ

た自分がそのまま自分らしく生きることができるように、と唄われています。

2番目の歌詞を紹介すると、

2. わたしらしく生きよう 自分を確かめて  
男らしくでもなく 女らしくでもなく  
ただ わたしを造られた神に应える  
ただ わたしらしく生きることで

ここでは、「男らしくでもなく 女らしくでもなく」と表現されています。これもとても大事なことばですね。「男らしく 女らしく」というのは、今でも私たちを縛っているものです。でもここでは、「自分らしく生きよう」と自分を励ましています。

この歌を作ったのは平良愛香さんという牧師さんで、20年位前に同性愛者であることを明らかにして牧師になった男性です。この歌は平良さん自身の決心というか思いが込められた歌なのです。

彼が、ホームページ上に次のような言葉を載せていました。

「神様が創ったものに不良品はない。神様は私たちのありのままを愛し祝福してくださっている。」

私たちも色んな自分らしくがあり、難しいことではあるのですが、誰かから押し付けられた「~らしさ」ではなく、「自分らしさ」を自分で見つけて、それを大切に生きていきたいと思います。

#### 全校礼拝(8/23) 新約聖書 コリントの信徒への手紙一12章14-26節

「多様性」という言葉を最近、皆さんもよく聞くことがあると思います。多様性(英語でダイバーシティ)は現代を生きる私たちにとって大切な言葉の一つです。と同時に、この言葉が指し示す範囲はとても広く、様々な文脈で使うことが出来るので、時に混乱してしまうこともあるかもしれません。

本日の聖書箇所は、この多様性について、聖書の観点から語ってくれている箇所です。もちろん、当時はまだ多様性という言葉自体は存在していませんでしたが、私

私たちはこの箇所から多様性についての大切なメッセージを汲み取ることができます。

私たちが汲み取ることができる一つ目のメッセージ、それは、体の各部分が異なった働きをしているように、私たちにはそれぞれ神さまから、異なった、かけがえのない役割が与えられているのだ、ということです。ただ「違いが存在している」というだけではなくて、そこに「かけがえのなさ(固有性)」を見出しているのが聖書の多様性の特徴です。

「かけがえがない」とは、言い換えますと、「替わりがきかない」ということです。私たちは一人ひとり、かわりがきかない存在として神さまに創られた。それぞれが、神さまから大切な役割を与えられている。私たちはこの根本のメッセージを、本日の体のたとえから読み取ることができます。

この在り方と正反対であるのが、違いを認めることができず、「あなたも自分と同じになれ」と他者に強要することです。固有性=かけがえのなさを否定し、相手を自分と無理矢理同化させようとする在り方は、聖書が伝えるあり方とは正反対のものです。

二つ目のメッセージ、それは、私たちはそれぞれの役割を通して、互いに補い合い支え合っているということです。体の各部分が異なる働きを通して互いに補い合っているように、私たちはそれぞれ、固有の役割を通して、互いに補い合っていることを伝えてくれています。

この在り方と正反対なのが、違いを受け入れることができず、自分とは異なる他者を「あなたは要らない」と排除しようとすることです。手紙の中に、次の言葉がありましたね。目が手に向かって「あなたは要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「あなたたちは要らない」とも言えない(21節)。他者に対して、「あなたは要らない」と言うことは、本来できない。異なる相手を切り捨て、排除しようとする姿勢は、やはり聖書が伝える在り方とは正反対のものです。

聖書が語る多様性。それは、私なりに言い換えると、

「違いがありつつ、一つ」である在り方です。違いを否定して一つになるのではなく、むしろ違いを通して一つとなる在り方を聖書は伝えてくれています。

最後に、次の言葉に注目してみたいと思います。《体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです》(22節)。

手紙の著者のパウロは、私たちが「違いがありつつ、一つである」ために、大切な役割を果たすのは「弱さ」であると述べています。弱さは「要らない」ものではなく、私たちにとってなくてはならない役割を果たしてくれているものなのです。なぜなら、私たちの目に弱く見える部分があることで、私たちは互いに支え合ってことを学んでゆくからです。《それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています》(25節)。これが、本日の聖書箇所から汲み取ることができる三つのメッセージです。

どうぞ私たちが違いを認め合い、弱さを受け止め合って、互いに大切に合ってゆくことができますように願っています。(花巻教会牧師・鈴木道也先生)

## <コロナ禍での盛附祭>

8月27日(土)に盛附祭が開催されました。コロナ禍で迎える3回目の盛附祭、今年度こそは従来の文化祭を計画していましたが、やはりコロナ第7波には勝てず残念ながら規模を縮小し、保護者の皆様だけをお迎えしての開催となりました。色々と規制があり、通常とは異なる形での文化祭となりましたが、生徒たちは創意工夫を凝らして準備を進めました。今年度生徒たちが掲げたテーマである「盛附って200色あんねん」には、「各クラスそれぞれの個性(色)を出してほしいから」という思いが込められています。なぜ200色なのかは謎のままですが、クラス発表では大好評のお化け屋敷、コスプレ喫茶、スナ×カフェ(何かと思ったら射的ができるカフェでした)そしてSDGsをテーマにした研究発表など、

生徒達の醸し出す様々な色が感じられました。また、密を避けるために全体の行事は避け、文化部によるステージ発表とクラス企画催事の参観を半分に分け、午前の部と午後の部で入れ替える二部制を実施しました。

ステージ発表では吹奏楽部から始まり、「ドラゴンクエスト序曲」や「栄光の架橋」、そして野球部から酒井宗紀君を助っ人(ドラム)に「かっぱれ倭武多」を演奏、顧問である村井先生も指揮をしながらのトランペット演奏を披露しました。音楽部は振付しながら「アンパンマンのマーチ」を披露、アンジェラ・アキの「手紙」には心打たれました。軽音楽部は3つのバンドが「Lovers」や「ヤング・アダルト」などノリノリで熱い演奏を行いました。ダンス部は3年生にとって最後のパフォーマンス。切れのある踊りにこちらも思わず体が動き出しそうでした。野球部の有志もステージに上がり盛り上がりました。ラストは3年生全員がサビの部分をもドレーで披露。最後はさんさ部が華麗な舞を披露、太鼓と笛と踊りが見事にシンクロ。各部の生徒からこのコロナ禍の中でも演奏する機会を設けてもらったことに感謝する言葉がありました。参観者も私語をせず拍手や手拍子をしながら参加してくれました。

全体企画(生徒会)の男装・女装コンテストは妖艶と言ったらいいのか言葉を選んでしまいますが、奇妙な盛り上がりを見せていました。そしてもう一つの目玉は、6月の主権者教育で実施した模擬投票の開票が行われたことです。今回も各政党から6人の方が参加していただき、開票結果と生徒代表の感想や意見に真摯に耳を傾けていらっしゃいました。代表の方々からは、「このような主権者教育を高校教育に組み入れるべきだ」「素晴らしい取り組みに敬意を表す、ぜひ全国の高校に広がってほしい」「若い世代に関心を持ってもらう取組だ」「政治家がもっと若い世代と交流して声をすくい上げる必要がある」「高校生の純粋な眼差しに心打たれた」などのコメントをいただきました。運営に携わってくれた生徒の皆さんに改めて感謝を申し上げます。